

入場無料

admission free

BANSHU-ORI COLLECTION

2015

RYU



- LOCALINA -
from ele & LANTIKI
MADE IN HYOGO



平成27年3月1日(日) 神戸国際会館こくさいホール
開場14:15 / 開演15:00 / 終演15:30 | 〒651-0087 神戸市中央区御幸通8-1-6

2つのブランドとのコラボレーションにより、『播州織』を用いたデザインの
世界感とMade in Japanのモノづくり作品を打ち出すことで、様々な播州織を
表現するランウェイファッションショーです。

RYU / デザイナー 木村竜也 - <http://cobachi.jp/>

LOCALINA / デザイナー 阿知波和也 - <http://lantiki.com/LOCALINA/>

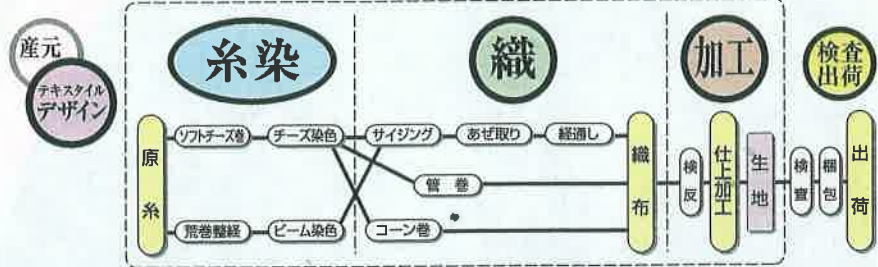
もっと先へ。時代とのコラボレーション[北播磨]より。

フレキシブルな提案と技術開発により、積極的な自己主張を続けています。

現在、西脇市を中心とする「北播磨」で生まれる播州織は、世界中の人々のファッションを支えています。先染織物という名のとおり、播州織は先に糸を染め、染め上がった糸で柄を織ります。そのため、自然な風合い、色合いの良さ、豊かな色彩、素晴らしい肌ざわりを持っており、ワンピース、シャツ、ハンカチ、テーブルクロスなど日常生活に必須のアイテム

ムをはじめ、マリエやフォーマルドレスなど現代の幅広いニーズを満たすテキスタイルとして高い関心を集めています。また、多品種、短サイクルのスピーディな生産ニーズに最新の技術革新で応えとともに主体性を持った商品企画や販売が行えるよう、産元・染色・準備・織布・加工が一体化した事業展開を進めています。

生産工程



播州織は、商品企画から染、織、仕上げ加工までを産地内で一貫して行っています。綿の先染織物が多く、生産形態は分業構造となっています。

テキスタイルデザイン テキスタイル部門は、綿の先染産地ならではの固有の技術に、パソコンの活用で多様な新商品の開発に取り組んでいます。



糸染

伝統技術に支えられた播州織の糸染業。チーズ染色及びビーム染色による量産体制を確立しつつ、小ロット向け綿染色にも対応。その高度な堅牢度は、世界市場から高い評価を得ています。また、染色排水処理施設を設置、環境対策にも取り組んでいます。



サイジング

縦糸の糊付け工程です。多色一斉サイジングで品質の安定とスピードアップをはかっています。

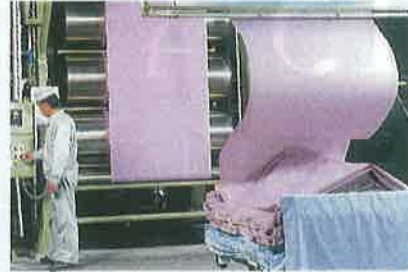


織布 我が国最大の先染織物産地の生産の軸となる部門です。多種の装置を駆使して、ギンガム、ドビー、ジャカードなど多彩な柄の織物が織り上げられます。その装置の多様さと小回りを活かして、小ロット、短納期に対応しています。



加工

シルケット加工、樹脂加工、サンフォライズ加工、しわ、起毛、形状安定加工など、様々な風合いや機能性加工を、綿、合織、新繊維などに施します。加工前の組成検査から、加工後さらに厳しい製品検査を行い出荷をしています。



環境対策

自然環境に配慮した染色排水の処理施設



脈々と受け継がれる播州織スピリット。 SINCE 1792.

1700年代始め

西脇をはじめ播州地方に、綿花の栽培始まる。草木染料で染めた生活衣料の自給自足である。



1792年

(江戸時代・寛政4年)

比延(現 西脇市比延町)の大工 飛田安兵衛が京都西陣から織機製作の技術を導入したと伝えられる。その後、農家の副業として普及する。

1826年

(江戸時代・文政9年)

「播州織由来書」作成される。(左)

1834年

(江戸時代・天保5年)

織屋仲間の組合「戎子團」が結成される。その「連名覚帳」(右)



江戸時代末期

すでに工場制手工業の段階に達し、産地が形成される。

1868年

(明治元年)

西脇・多可地方の機業家が約70戸に達する。染色は藍染を中心とした植物染料であった。

1877年

(明治10年)

わが国の染色工場に合成化学染料が輸入され、色彩が多様化し近代化への移行の途がひらかれる。この頃播州地方で使われていた「高機(上機)」。木製織機の標準型で、動力織機が普及するまで長く使用されていた。



1900年

(明治33年)

織機の動力用に石油発動機が導入される。

■明治末期の織布工場

織機のフレーム部分は木製である。



■明治から昭和初期にかけての水洗い作業。優れた水質と豊かな水量に恵まれた杉原川での水洗い風景。



1923年

(大正12年)

動力源として、電力の使用が普及する。この年、関東大震災起きる。貿易港が横浜から神戸にシフトされ輸出転換の転機となる。

■大正期の染色工場



■昭和初期の織布工場。

東南アジア向け先染織物の黄金時代であった。

1937年

(昭和12年)

播州織業界の保有織機台数16,368台に達し、黄金時代を築く。第2次世界大戦の勃発まで東南アジアなどの海外市場を開拓した。

1960年

(昭和35年~)

高級ギンガムをはじめ、高付加価値先染織物でアメリカなど先進諸国への輸出が多くなる。

1987年

(昭和62年)

生産量のピークとなる(387,769千平方メートル)。70%以上の輸出から国内向け需要に力を入れ始める。

1990年代

国内外の経済状況の変化や、中国や東南アジア諸国の製品の台頭で生産量が減少し始める。

2000年代

高速自動織機や合理化された製造ライン、コンピュータによる品質管理など完備された最新システムで、原糸準備、染から織、仕上げ加工までを産地で一貫した工程を行える強みを活して、多品種、小ロット、短納期、短サイクルの需要にも応えられ、高品質・高付加価値製品で国内向けの比率が高くなってきている。

協力：西脇市農土資料館

公益財団法人 北播磨地場産業開発機構

〒677-0015 兵庫県西脇市西脇990番地(西脇経済センタービル) TEL.(0795)22-7676 FAX.(0795)25-2196

http://kitaharima-jibasan.org/ e-mail:kitahari@silver.ocn.ne.jp